【司会（仁藤）】　皆さんおはようございます。日本歴史研究専攻の仁藤と申します。本日の司会を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、まず第１本目の御報告ということで、日本文学研究専攻の落合先生から「国文学研究資料館における資料の収集・保存・公開と研究について」、副題は「原本資料を中心に」ということで御発表をお願いします。どうぞよろしくお願いします。資料配付がございますようなので、ちょっとお待ちください。（資料配付）

【落合】　国文学研究資料館の落合と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

では、資料を配っていただいている間に少し話を始めておきたいと思います。私の発表レジュメは表裏１枚になっておりますけれども、一応それに沿って、今配っていただいている別紙資料を時々参照しながら進めてまいります。

まず、レジュメの裏側をちょっと見ていただきたいのですが、

＊国文研における展示担当部局（教員と担当事務で構成）

昭和52～53年度	研究情報部
昭和54～平成15年度	整理閲覧部参考室
平成16～19年度	普及・連携活動事業部〈平成16年度法人化〉
平成20年度～	学術企画連携部展示企画室〈平成20年度立川移転〉

その一番最後に、今回の話は展示にかかわる話ということなので、国文研において展示を担当する部局の変遷を示してあります。国文研は昭和47年に創設されましたが、準備期間を経て、実際に閲覧業務を開始したのは昭和52年でした。それと同時に、展示も始めております。当初展示業務を担当していたのは研究情報部ですが、昭和54年度から整理閲覧部が出来て、その参考室が担当となり、平成15年度まで二十五年間の長期にわたっています。平成16年度から国文研が法人化されたのを機に組織替えを行い、展示の担当が普及・連携活動事業部という部局に移りました。そして平成19年度の末に品川区の戸越から立川市に移転したのに伴い、また組織替えをして、現在では展示企画室というところで行っております。これは、教員五名、機関研究員一名と担当事務員で構成されています。本来ならば、今回のこのフォーラムには展示企画室の室長が出てきて話をするのがふさわしいと思いますが、室長は月曜日に非常勤があって来ることができないということで、代わりに私が指名されたという次第であります。

それで、レジュメの表側のほうに戻りますけれども、基本的に国文研は博物館ではないわけですね。こちらの歴博さんとかそれから民博さんのように、展示事業というのをあまり表には出していない。国文研は、全国各地に存在する文献資料、国文学を中心とする文献資料を調査して、それを写真によって収集して、研究者をはじめとする一般の人々に公開して利用してもらう、それが基幹事業であって、その傍ら展示も行っているという位置づけになるわけです。

先ほど申しましたように、平成20年に国文研は立川に移転してまいりました。そのときに建

物が新しくなったわけですけれども、展示室もかなり立派なものを造っていただきました。それに伴って、以前戸越にあった時よりも大分充実した展示も行われるようになり、予算も多少ふえたのですが、配分としては年間予算全体の40分の１から50分の１くらいが展示の予算枠になっています。

それで、展示にはあまり予算が使えないので、展示のための資料購入ということもできないのですね。展示用の原本を買うための予算枠がないので、一般の原本資料の購入費や、教員の研究費、あるいは科研費などで買った原本を展示にも使っている、という実情であります。というわけで、今回のシンポジウムの副題の言葉を使って言えば、「保つ」「究める」についてはともかくとしても、「集める」と「伝える」、特に展示の形で伝えることについてはなかなか思うようにならない、という現状があることをまず申し上げておきたいと思います。

次に、国文研における展示の現状と今後について簡単に申し上げます。国文研では現在、年に数回のそれぞれ特定のテーマによる展示と、年に１回の「和書のさまざま」という展示を行っております。別紙資料の右下に番号が打ってありますが、最後の５番の紙をごらんください。

平成20年度

①移転記念特別展「よみがえる時一春日懐紙を中心に一」

平成20年5月26日～6月20日　664名

②企画展示「明治開化期の錦絵」

平成20年8月11日～9月5日　343名

③立川移転記念特別展「源氏物語一千年のかがやき一」

平成20年10月4日～10月31日　4069名　※初めて特別鑑賞料(400円)を徴収

④企画展示「試みの絵巻展」

平成20年11月17日～12月19日　718名

⑤企画展示「今年の「干支」展」

平成21年1月19日～2月13日　446名

⑥研究展示「日本実業史博物館からのメッセージ一渋沢栄一と算盤・敬三と広告一」

平成21年3月2日～27日　521名

平成21年度

①通常展示「和書のさまざま一書誌学入門一」

平成21年4月27日～6月19日　899名

②人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」

平成21年7月18日～8月30日　3712名　※特別鑑賞料　大人300円

③特別展示「江戸の長編読みもの一読本・実録・人情本一」

平成21年9月25日～10月23日　503名

◎「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」による

④特別展示「物語の生成と変容」

平成21年11月9日～23日　523名

◎「平安文学における場面生成研究」による

⑤企画展示「能楽資料展」

平成21年12月7日～25日　292名

⑥特別展示「江戸の歌仙絵一絵本にみる王朝美の変容と創意一」

平成22年1月8日～2月5日　1413名

◎「日本古典籍特定コレクションの目録化の研究」による

平成22年度

①通常展示「和書のさまざま一書誌学入門一」

平成22年4月15日～6月18日　548名

②人間文化研究機構連携展示「チベット　ポン教の神がみ」

平成22年7月2日～9月10日　3107名

③特別展示「鉄心斎文庫短冊文華展」

平成22年10月4日～11月12日　1402名

④通常展示「新収資料展物語そして歴史一平安から中世へ一」

平成23年1月24日～3月18日　947名

平成23年度

①研究展示「近世の和歌御会二〇〇年一久世家文書にみる公家の文事」

平成23年5月23日～6月24日

◎「久世家文書の総合的研究」による

②特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」

平成23年10月8日～12月4日　※特別鑑賞料　300円

◎「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」による

③連携展示「都市を描く一京都と江戸一第Ⅱ部「江戸名所と風俗画」」

平成24年3月27日～5月6日　※特別鑑賞料　300円

平成24年度

①特別展示「鴨長明とその時代一『方丈記』八〇〇年記念」

平成24年5月25日～6月23日

◎「大福光寺本『方丈記』を中心とした鴨長明作品の文献学的研究」による

②通常展示「和書のさまざま一書誌学入門一」

平成24年7月19日～9月7日

③研究展示「江戸の表現　浮世絵・文学・芸能」

平成24年10月17日～11月20日

◎「近世的表現様式と知の越境一文学・芸能・絵画による総合研究」による

④特別展示「樋口一葉「たけくらべ」自筆原稿展」
平成24年11月12日～20日
⑤通常展示「新収品・新寄託品展古筆のたのしみ」
平成24年12月12日～平成25年1月11日
⑥連携展示「記憶をつなぐ一津波災害と文化遺産一」
平成25年1月30日～3月15日

これが平成20年度、つまり立川に移転して以降の、本年度の予定も含めた展示の一覧です。年によって回数が違い、多少の増減はありますけれども、例えば平成21年度では、年度の初めに①通常展示「和書のさまざまー書誌学入門ー」をやって、その後②機構連携展示「百鬼夜行の世界」を行っています。その後、③と④と⑥に二重丸で、例えば③ですと「◎「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」による」と書いたのは、そういう題目の研究プロジェクトが国文研で行われていて、それの成果発表としてこういう展示を行ったという意味です。同じように、平成23年度の①と②、平成24年度の①と③も、それぞれ特定の研究プロジェクトの成果発表という形で行われております。なお、先ほど申しました「和書のさまざまー書誌学入門ー」という展示は一応年に１回やることになっております。ただ、この範囲で言うと平成20年度と23年度は行ってないのですが、原則的には行うことになっています。

ちなみに、研究プロジェクトの成果発表としての展示というのは、平成16年に法人化がなされて、国文研は研究組織という形をとることになって、研究プロジェクトをいくつも行うことになったわけですが、その成果発表の場として展示を利用する、ということが始まったわけです。特に平成21年度は、最初の６年計画の最終年度に当たりましたので、３つの研究プロジェクトに基づく展示が集中したということです。

特に近年では、展示がまず決まっていて、それに向けて研究プロジェクトを立ち上げて、展示の内容を考えていくという形も出てきております。平成23年度の②「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」という陽明文庫の和歌資料の展示と、本年度行いました『方丈記』とその作者についての展示、24年度の①「鴨長明とその時代ー『方丈記』八〇〇年記念」という、この２つは、形としては研究プロジェクトの成果発表なのですけれども、これは展示を行うことが先に決まっていて、それに向けて研究プロジェクトを組織して、出品物とか、それにつける解説を研究会を通して検討していったということなのです。だから本末の順序は逆なのですが、プロジェクトと展示が密接に関連している点は、プロジェクトの成果発表として企画された展示と同じです。

ということで、特に立川に移転して以降は、研究プロジェクトと結びついた展示が増えてきているという現状であります。

それに対して、立川に移転する以前はどうだったかというと、別紙資料の１番から順に見ていただきたいのですが、これは国文研で10年ごとに記念誌をつくっておりまして、その展示関

係のところをコピーしたものです。

特別展示

回	年　月　日	内　　容	備　　考
第１回	昭和52年７月25日 ～30日	開館特別展示　国学者自筆稿本と奈良絵本を中心として	『国文学研究資料館開館特別展示目録』を刊行
第２回	昭和52年11月10日 ～11日	国学者自筆稿本と奈良絵本を中心として	
第３回	昭和53年３月４日 ～10日	久松博士蔵歌論書及び本館蔵国学関係書を中心として	『国文学研究資料館特別展示目録　二』を刊行
第４回	昭和53年６月21日 ～７月７日	「古今集」初雁文庫を中心として	『国文学研究資料館特別展示目録　三』を刊行
第５回	昭和54年８月20日 ～25日	日本の絵本ならびに版本の挿絵	『国文学研究資料館特別展示目録　四』を刊行
第６回	昭和54年11月26日 ～12月１日	和歌と歌論――初雁文庫・久松博士本を中心として――	
第７回	昭和55年９月４日 ～10日	歌書展	
第８回	昭和55年11月10日 ～15日	館蔵貴重書展	『国文学研究資料館特別展示目録　五』を刊行
第９回	昭和56年９月３日 ～９日	館蔵貴重書展	
第10回	昭和56年11月12日 ～18日	国学者自筆本と新収資料を中心として	『国文学研究資料館特別展示目録　六』を刊行

常設展示

回	年　月　日	内　　容
第１回	昭和52年12月６日 ～昭和53年２月27日	日本文学史
第２回	昭和53年４月１日 ～９月22日	八犬伝とその周辺
第３回	昭和53年10月２日12月26日	幕末維新の文学
第４回	昭和54年３月５日８月11日	名所と文学
第５回	昭和54年８月28日 ～11月17日	日本の絵本並びに版本の挿絵
第６回	昭和55年１月10日 ～４月12日	古典文学その流れ――源氏物語・百人一首・水滸伝など――
第７回	昭和55年４月23日 ～６月28日	徒然草
第８回	昭和55年７月10日８月27日	中世文学――そのいくつかの糸筋――
第９回	昭和55年10月１日 ～10月15日	江戸から明治へ――戯作と近代文学――
第10回	昭和55年11月25日 ～昭和56年２月14日	中世文学――そのいくつかの糸筋――
第11回	昭和56年２月23日 ～４月21日	江戸から明治へ――戯作と近代文学――
第12回	昭和56年５月７日 ～７月７日	平安時代の文学
第13回	昭和56年７月15日 ～11月７日	日本文学の空間
第14回	昭和56年11月27日 ～昭和57年１月28日	平安時代の文学
第15回	昭和57年２月８日 ～４月17日	狂歌展

特別展示　　（第10回までは「十年の歩み」参照）

回	年　月　日	内　　容
第11回	昭和57年９月２日 ～８日	新収資料展
第12回	昭和57年10月29日 ～11月13日	創立十周年記念特別展（館蔵貴重書展） 国文学関係39点、史料館関係27点
第13回	昭和58年11月１日 ～15日	中世歌論書展　－久松家寄託資料－
第14回	昭和59年11月１日 ～15日	蔵書印展
第15回	昭和60年11月１日 ～15日	新収資料展　－昭和57～59年度期－
第16回	昭和61年11月１日 ～15日	古今集　－初雁文庫本を中心として－
第17回	昭和62年11月２日 ～14日	絵巻・絵本ならびに版本の挿絵
第18回	平成元年11月１日 ～15日	新収資料展　－昭和60～62年度期－
第19回	平成３年11月１日 ～15日	新収資料展　－昭和63～平成２年度期－

常設展示　　（第15回までは「十年の歩み」参照）

回	年　月　日	内　　容
第16回	昭和57年５月７日～７月10日	八犬伝とその周辺
第17回	昭和57年７月19日～８月26日及び ９月13日～10月21日	徒然草
第18回	昭和57年12月１日 ～昭和58年３月24日	江戸から明治へ
第19回	昭和58年４月11日～６月25日	日本古典文学史
第20回	昭和58年７月４日～９月29日	史書と日記　－古代・中世－
第21回	昭和58年10月11日～24日及び 11月18日～12月26日	近世前期の文学
第22回	昭和59年１月17日～３月24日	平安朝物語

回	年　月　日	内　　容
第23回	昭和59年４月23日～６月23日	和書のさまざま
第24回	昭和59年７月２日～９月22日	源氏物語
第25回	昭和59年10月８日～24日及び 11月19日～12月15日	近世後期の文学
第26回	昭和60年１月16日～３月23日	古典文学の参考図書
第27回	昭和60年４月８日～６月22日	古典文学の流れ
第28回	昭和60年７月１日～９月21日	名所と文学
第29回	昭和60年10月１日～24日及び 11月20日～12月26日	上代の文学
第30回	昭和61年１月13日～３月22日	狂歌

第31回	昭和61年４月21日～６月28日	和書のさまざま
第32回	昭和61年７月21日～10月18日及び 11月25日～12月20日	徒然草
第33回	昭和62年１月19日～３月20日	平安朝物語
第34回	昭和62年４月13日～６月27日	和書のさまざま
第35回	昭和62年７月20日～９月26日	近世小説
第36回	昭和62年10月12日～24日及び 11月24日～12月26日	中世の文学
第37回	昭和63年１月18日～３月24日	源氏物語
第38回	昭和63年４月11日～６月18日	和書のさまざま
第39回	昭和63年７月18日～11月12日	名所と文学
第40回	昭和63年11月28日 ～平成元年３月24日	狂歌
第41回	平成元年４月17日～７月１日	和書のさまざま
第42回	平成元年７月17日～10月14日	平安朝物語
第43回	平成元年12月７日 ～平成２年３月24日	江戸から明治へ
第44回	平成２年４月16日～６月30日	和書のさまざま
第45回	平成２年７月16日～９月29日	上代の文学
第46回	平成２年10月15日～12月22日	徒然草

回	年　月　日	内　　容
第47回	平成２年１月21日 ～平成３年３月23日	古典文学の参考図書
第48回	平成３年４月15日～６月29日	和書のさまざま
第49回	平成３年７月15日～10月12日	源氏物語
第50回	平成３年12月２日 ～平成４年３月14日	近世前期の文学
第51回	平成４年４月13日～７月３日	和書のさまざま
第52回	平成４年７月20日～10月16日	中世の文学

特別展示（平成４年度以降）

回	年　月　日	名　称　・　内　容
平４	平成４年11月２日～14日	創立二十周年記念特別展示（会場：当館展示室、以下同）
平５	〔開催せず〕	
平６	平成６年４月11日～27日	春季特別展示 万葉集
平７	平成７年５月15日～26日	春期特別展示 杉浦梅潭と幕末･明治の漢詩人たち
	平成７年７月１日～30日	商売繁盛 〔品川区と共催〕（会場：品川歴史館）

平８	平成８年５月13日～24日	春期特別展示 近世文字社会のひろがり
平９	平成９年５月12日～23日	春期特別展示 よみがえる宗安小歌集―中世歌謡の世界―
平10	平成10年５月25日～６月５日	鉄心斎文庫所蔵 伊勢物語展
平11	平成11年10月25日～11月６日	芭蕉自筆『奥の細道』展
平12	平成12年６月19日～30日	元政―弱者の奇蹟―
平13	平成13年12月３日～21日	史料館50周年記念特別展示錦絵にみる近代のあけぼの
	平成14年２月12日～３月１日	田安徳川家伝来古典籍展
平14	平成14年５月20日～31日	高乗勲文庫貴重書展

通常展示（平成４年度以降）

回	年　月　日	名　称　・　内　容
第51回	平成４年４月13日～７月３日	和書のさまざま（会場：当館展示室、以下同）
第52回	平成４年７月20日～10月16日	中世の文学
第53回	平成４年12月１日～平成５年２月19日	近世後期の文学
第54回	平成５年４月12日～６月25日	和書のさまざま
第55回	平成５年７月12日～９月24日	版本の挿絵
第56回	平成５年10月12日～12月24日	仏教と文学
第57回	平成６年１月17日～３月24日	史書と日記

回	年　月　日	名　称　・　内　容
第58回	平成６年５月16日～８月26日	和書のさまざま
第59回	平成６年９月12日～12月22日	江戸から明治へ
第60回	平成７年１月17日～４月21日	古典文学の注釈書
第61回	平成７年６月12日～９月８日	和書のさまざま
第62回	平成７年９月25日～12月22日	追善の本
第63回	平成８年１月16日～４月26日	名所と文学
第64回	平成８年６月10日～９月６日	和書のさまざま
第65回	平成８年９月24日～12月19日	臼杵藩吉田家の文学
第66回	平成９年１月13日～４月25日	平安朝物語
第67回	平成９年６月９日～９月５日	和書のさまざま
第68回	平成９年９月16日～12月19日	新収 明治の本

第69回	平成10年１月26日～５月８日	「好色一代男」への道
第70回	平成10年７月６日～８月７日	軍記物語の流れ
第71回	平成10年10月26日～12月11日	和書のさまざま
第72回	平成11年２月15日～３月24日	版本の挿絵
第73回	平成11年５月24日～６月25日	館蔵演劇資料展
臨　時	平成11年８月24日～26日	江戸堂上派武家歌人の世界
臨　時	平成11年11月11日～24日	古典の未来
第74回	平成12年２月14日～３月24日	和書のさまざま
第75回	平成12年９月26日～10月13日	『源氏物語』とその前後
臨　時	平成12年11月13日～12月１日	明治期の文学と出版
第76回	平成13年３月12日～５月18日	和書のさまざま
臨　時	平成13年７月31日～８月５日	源氏物語の諸本と絵本〔国の移転機関と地域との交流 展示会〕（会場：立川市女性総合センター）
第77回	平成13年10月１日～11月16日	近世前期の文学－小説を中心に－
第78回	平成14年３月18日～４月26日	和書のさまざま

臨時展示を含む。第73回から「常設展示」を「通常展示」と改称。

平成14年度（続き）

② 特別展示「古典が手元に届くまで―館蔵貴重書のかずかず―」
　平成14年11月11日～28日

③ 通常展示「和書のさまざま」
　平成15年3月18日～5月15日

平成15年度

① 特別展示「中村真一郎江戸漢詩文コレクション展」
　平成15年5月26日～6月6日　448名

② 特別展示「八戸市立図書館所蔵「読本」展」
　平成15年10月8日～24日　564名

③ 通常展示「和書のさまざま」
　平成16年2月2日～5月27日

（以上、国文学研究資料館発行『十年の歩み』昭和57年10月、『国文学研究資料館の20年』平成4年11月、『国文学研究資料館30年誌』平成14年11月に拠る。）

この記念誌では、「特別展示」と「常設展示（通常展示）」と分けて書いてありますけれども、特に常設展示は、ごらんいただいてわかりますように、一般的な文学史の紹介とか、特定の作

品をテーマにする場合でも例えば『徒然草』や『源氏物語』といった、割と一般的な、有名な作品を取り上げていて、研究者よりは一般の人に向けて国文学を紹介するという趣旨の展示が多かったのです。そして、それと別に特別なテーマを立てて特別展示を時々行っていたという状況なのですが、それに対して現在―大雑把に言って法人化以後は、昔の常設展示、通常展示に当たるものがほとんど行われていないということがあります。

そういうところに、外部の評価委員会から、立川への移転以後、立派な展示室ができたにもかかわらず、開室の日数が少ないのではないかという指摘があったそうなのです。確かに昨年度の例では、年度末からの最後の展示を含めても年に３回、前の２回はそれぞれ１カ月と２カ月程度開催しておりますけれども、日曜・祝日など休室日もありますし、開室日数を全部足しても、年間の四分の一にもならないだろうと思います。だからもうちょっと開けなさい、という指導があったらしいのですね。

そこで、国文研で考えまして、現在年に１回行っている「和書のさまざまー書誌学入門ー」という日本の古典籍の概説的な展示を、常設展化することになりました。しかし、一年中そればかりというわけにもいきませんし、資料の保存や閲覧利用の観点から、特定の資料を展示し続けることもできませんので、展示物を時々入れ替えなければなりません。そこで、その展示替えの期間を利用して、特別展示を年に二、三回の割合で挟んでいくと、来年度以降そういうふうにしようではないかという方針が大体決まっております。

ということなのですが、実はこの「和書のさまざま」を常設展にするために、現在のものをリニューアルすることになっているのです。その案を私がつくるように言われているので、そのこともあって今日は報告者として指名されたのかと思います。まだ細かいところまで考えていないのですが、この「和書のさまざま」をどういう内容の常設展にするか考えなければならなくなった時に思ったのは、今まで…といっても、ごらんになっていない方もいらっしゃると思うので、わかりにくいかもしれませんが、今までの「和書のさまざま」は、入門ということではもちろん意味がなくはないのですけれども、いろいろな問題があると思うのですね、私としては。展示の仕方の問題というよりはむしろ日本の書誌学そのものの問題だと思うのですけれども、何といいますか、とりあえず日本の古典籍の概略を知るには悪くはないけれども、何も刺激がないというか、知っている人には当たり前のことしか書いてないし、一方では当然考えなければならないことも必ずしも問題にされてないということもあったりするのです。それで新しい「和書のさまざま」は、ちょっと抽象的な言い方ですけれども、レジュメにも書きましたように、これまでみたいな入門的な、もしくは概説的な展示にとどめるのではなくて、日本の書物について総合的・体系的に考えるきっかけを与えるような、そして今後の日本古典籍書誌学のあるべき方向を示すような、そういう展示にしてみたいと考えているわけです。

国文研の場合、一応看板には「国文学研究資料館」と掲げて、国文学を主たる対象にはしておりますけれども、実際には国文学に限らないで、広く、あらゆるジャンルの古典籍を調べているわけです。それがほかの機関とは違った特色だろうと思いますので、創設以来四十年にわ

たる調査成果を踏まえて、新しい日本の古典籍についての学問を構想して、学界や一般に向けて発信していくことは、国文研にふさわしい仕事ではないかと思います。その一環として、「和書のさまざま」という展示を、新しく組み立て直してみたいと考えております。

それとともに、「和書のさまざま」以外の展示として、一つには現在と同じように、研究の成果を学会や一般に問うという形での研究的な展示を、これからも行っていく必要があると思います。その研究の今後を見据えて、研究を進展させるようなテーマや内容の展示を行うこと、これは当然必要であります。もう一つは、現在ではほとんど行っていないのですけれども、立川移転以前の戸越時代に行っていたような、国文学の啓蒙・普及をはかる展示も必要であろうと思います。やはりそういう一般に向けた展示も大事だと思いますので、それは「和書のさまざま」の一角を使って、時々内容を入れ替えながら小特集的な展示を行っていく、という形で対応したらどうかと考えております。結局「和書のさまざま」というのは、文学に限らない、日本の古典籍全体にわたる、要するに書物に特化した展示にならざるを得ないので、それに対して特に文学をテーマとする展示として、研究的な展示と一般的に文学を紹介する展示と、その２本立ての形で行っていったらどうか、と考えている次第であります。

あと、補足として２点ほど言及しておきたいのですが、国文研では最初に申しましたように、古典籍を初めとする資料類を、マイクロフィルムやデジタル画像で収集して、閲覧に供しております。それは展示の対象にはならないということで、今回のテーマに直接かかわってこないのですが、しかし、展示の対象にならないという点を別とすれば、今回の全体のテーマの「集める」「保つ」それから「究める」、という３つのところには、このマイクロ・デジタル資料も関係してくるわけです。だから国文研においては、今回の話の直接の対象にはならないけれども、マイクロ・デジタル資料についても、一応視野に入れた上で考える必要があるかなと思っております。ということを１点補足させていただきます。

それからもう１点、国文研の原本資料の収集に関する問題として、これは個人的な感想といいますか、意見なのですけれども、何を目的として原本を買うのかについて、館内の研究者全員の意見が合致し、計画的に購入を進める状況にはなかなか至り難いということがあります。もちろん購入にあたって、何らかの点で研究的な意味があるものを買うという、そこの一線は当然守られているのですけれども、具体的なものを買うときに、なぜこれを買うのかという推薦者の説明に対して、必ずしも全員が納得した上で購入しているわけでもないのです。何ていうか、言った者勝ちみたいなところもあるのですね。（笑）そのときに、例えば国文研の研究プロジェクトに役に立つからという理由で、これを買ってほしいということもあるのですけれども、研究プロジェクトというのは、長くても五、六年で終わってしまうので、プロジェクトのことを考えて資料を集めていくというのも、少し半端な結果になってしまうのではないかという懸念があるわけです。

原本収集の問題点としてもう一つ、これに関しては、お金の問題が当然かかわってくるので、いい資料を集めることには誰も異論はないと思うのですが、重要な資料ほど値段が高いので、

そうするとどうしても買える本の数が少なくなってしまう。重要な資料を買うと、そのために他の資料が買えなくなってしまう、そういう悩みが常にあります。

原本を収集するということについて、館内の教員には様々な見解があります。これに研究プロジェクトの年限、あるいは人員の異動などの条件も加わります。統一的な見解のもとに継続して収集を進めることが、結果的に難しくなってしまう事情はあるのですが、やはり原本資料の収集は、かなり長い歳月をかけて計画的に進める必要があるのではないか。これは、国文研として今後考えるべき問題として触れておきたいと思います。

ちょっと急いでしまったので少し時間が余ったようですが、後でまた必要なところは補足いたします。大変雑駁なお話で恐縮ですけれども、とりあえずこれで私の話は終わりにいたします。（拍手）

【司会（仁藤）】　どうもありがとうございました。国文研さんの博物館機能を中心とした現状と問題点について要領よくまとめていただいたかと思います。どうもありがとうございました。